

「アベック」の意味はありません。また、コンサートなどで、アンコールと叫んで再演奏を求めたりしますが、フランス語のencoreは「再び」とか「もう一度」といった意味の副詞で、日本語の「アンコール」のような用いられ方はしません。フランスで再演奏を求めるときにはBis, bis!と叫びます。

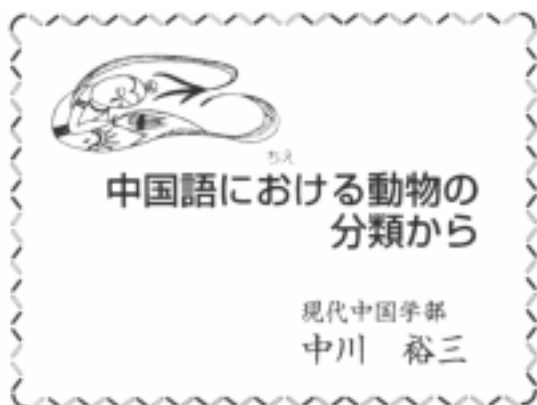
以上、ごく簡単にフランス語起源の外来語を紹介しましたが、さまざまな分野の日本語の中にそれとなくフランス語の単語が忍び込んでいます。国語辞典や外来語辞典で、どのような単語がフランス語から入っているかを調べてみると、意外な発見をすることがあるかもしれません。

<クイズ> 次の外来語の中にフランス語起源のものはいくつあるでしょうか。



- (1) アンケート
 (2) ビス (=ねじ) (3) ピーマン (4) シルエット
 (5) シュー・クリーム (6) マンション
 (7) クレヨン (8) デッサン (9) テラス (10) コンクール

(解答は20ページ)



日本語では、たとえば本を数えるとき、「本1冊」のように、書籍類専用の助数詞「冊」を用いますが、中国語では、「一本書」のように量詞「本」を用います。この助数詞あるいは量詞とい

うものは、事物を数えるときに文法的に必要な要素なのですが、世の中の森羅万象を様々なカテゴリーに分類する役目を果していることから、類別詞とも呼ばれます。

さて、動物のカテゴリーは一般に、日本語では類別詞「羽」「匹」「頭」、中国語では“隻”“匹”“頭”を用いて表します。日本語は中国語と同様に「匹」「頭」という漢字を用いるのですが、面白いのは、日本語と中国語では動物の分類の仕方が部分的に一致しない点です。日本語ではニワトリやネコは「ニワトリ1羽」「ネコ1匹」のように「羽」「匹」という異なったカテゴリーに分類されるのに対し、中国語では“一隻鶏”“一隻猫”のように同じ“隻”のカテゴリーに分類されます。またウシやウマは、日本語では「ウシ1頭」「ウマ1頭」のように同じ「頭」のカテゴリーに分類されるのに対し、中国語では“一頭牛”“一匹马”のように“頭”“匹”という異なったカテゴリーに分類されます。

同じ漢字を用いながら、どうしてこのような不一致が起こるのでしょうか。この問題を解くカギは、日本語と中国語の背景である社会や文化の相違にあります。実際、中国のように広大な国土と悠久の歴史を有する国においては、一国の中でさえ、分類の仕方が地域的、歴史的に異なっているのです。

まず地域的に見てみると、動物のカテゴリーは、中国の北方では前述の“隻”“匹”“頭”で分類され、“隻”が鳥類と小動物、“匹”がウマ、“頭”が大動物のカテゴリーを表します。ところが南方のある地域では、あらゆる生物を“隻”と“尾”の二つの類別詞で区別し、“隻”が足のある生物（主として獣類），“尾”が足のない生物（主として魚類）を表します。中国には古くから南船北馬という成語があります。この成語が本来意味するところは、中国南方は湿潤多雨で河川や水路が発達していることから移動手段は主として船に頼り、北方は乾燥していて陸続きであることから馬に頼っていたということです。中国北方でウマ専用に使われる“匹”という類別詞が用意されているのは、北方においてウマがきわ

めて重要な役割を担っていたことの現れですし、南方で陸上動物と水中生物を“隻”と“頭”で区別するのも、河川や水路が発達している南方特有の気候・風土と密接な関係があるのです。

次に歴史的に見てみると、上古の昔、中国では“隻”は鳥類，“匹”はウマ，“頭”はあらゆる動物を包括したカテゴリーを表していました。このことから当時はまだウマ以外の動物の間にはそれほど大きな価値の差がなかったことがわかります。ところが南北朝時代になると、北方異民族の侵略により、当時の支化の中心であった中原と呼ばれる地域の社会に劇的な変化が起きました。その変化の一つとして、人間より小さな動物と大きな動物の間で価値の差が生じ、それが後に起こった類別詞の体系再編の引き金となったと考えられます。現在“隻”のカテゴリーに共通点の見出しにくい鳥類と小動物が同居しているのは一見奇妙にも思えますが、社会的に小動物と大動物を区別する必要が生まれた結果、小動物が“頭”のカテゴリーから元来鳥類のカテゴリーであった“隻”に引越して来たという歴史的な流れに目を向ければ、納得できるのではないのでしょうか。

以上のように、社会や文化が異なれば、同じ動物でもそれを分類するときの着眼点が異なります。分類の仕方は、中国という一国においてさえ一様ではないのですから、漢字という共通点があるとはいえ、日本語と中国語という異なった社会的、文化的背景をもった言語の間で一致しないのはむしろ当然です。

言葉はコミュニケーションの手段ではありますが、言葉を通してその国の人たちの社会やそこで培われた文化を理解することは、

外国語学習のより高い目標だといえるでしょう。



こんにちロシア語は、旧ソ連邦内に住むおもにロシア人の母語として、一億六千万人の話者によって、日常的に話されています。そして、ソ連の崩壊後いまなお、ロシア国内の多くの少数民族やかつての共和国の諸民族にとって、唯一の共通語としても用いられています。

ロシア語は、あれだけ広範囲の地域で用いられているにもかかわらず、日本海に面したウラジオストクから首都のモスクワに至るまで、ほとんど方言差のない均一な言葉が話されているのです。これは、ロシア人がヨーロッパからウラル山脈を越え、次第にシベリアの各所に移り住むようになってから、あまり時代がたっていないことや、ロシア語そのものがとても保守的で、数世紀の間大きな変化を受けていないことに関係しています。日本語が狭い国土のなかで、いくつもの方言がはなされているのと比べると、とても対照的であるといえます。

よく知られているように、ロシア語では、キリル文字という少し変わったアルファベットが使われています。この文字は、一見変わっているといっても、英語のアルファベットと全く異なっている訳ではありません。そもそもキリル文字が考案されたのは、9世紀後半にビザンチンの教会が、スラヴ民族の間にキリスト教を布教することを目的としたものでした。そして、当時ギリシアで用いられていた文字をもとにして、アルファベットをつくり、当時のスラヴ語に特有の音を表

